
裏世界の住人

桜庭・FF・二次

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

裏世界の住人

【NNコード】

N4559Y

【作者名】

桜庭・FF・一次

【あらすじ】

ポケモントレーナー育成学校を卒業したものの、就職難の壁に押されていた浦野実がやつとの思いで見つけた就職先は、みんなが忌み嫌う悪の組織、ロケット団だった。

* 本小説はポケモン徹底攻略様のポケモンノベルにも掲載されております。

第一話 part 1

「なんなんだよ、こゝ……」

ジョウト地方一の都会、コガネシティ。その街のあるビルとビルの間の路地に立ち尽くしている一人の男がポツリと何かを呟いた。その表情からはまるで何かに裏切られたような、絶望が滲み出していた。後ろから軽く押せば膝から崩れ落ちてしまいそうだ。

そんな彼はなんとも奇抜な服装に身を包んでいた。胸に赤く大文字のRが刺繡された黒を基調とした服、頭のサイズに合わない大きめの黒帽子。一般市民と呼ぶにはいかにも不適応な格好だ。

そう、彼はまさに一般の人間ではなかつたのだ。

*

時は遡ること数日前。お隣のカントー地方との地方を結ぶ関所が近くにあり、そのことからカントー住民からは始まりの村とも呼ばれるワカバタウンに、その男は暮らしていた。

「実、あなた旅人やめてからダラダラしてばかりよ。偶には仕事を探さないと」

「五月蠅い。こっちだって仕事ぐらい探してる。でも、こんな田舎には良い仕事なんて無いし、だからといって遠くの街へ出かけようしたら、親父がそんなとこ行くぐらいなら俺の仕事を継げって言うし、どうしようもないじゃないか」

まだ陽も昇つて間もない筈だが、そんな時間帯から親子で口論している様子が見受けられる。その中の母親に怒られて少々不機嫌になっている男の名前は浦野実という。彼は名門のポケモントレーナー

一 育成学校を出た人間で、それからは旅人として生活をしていくつもりだったのだが、思うように金を稼ぐことも勝負に勝つことも出来ず、終には自宅に戻って来たのだといつ。

そのため、実は毎日のように親から仕事についてとやかく言われる破目となつていて。実自身も、毎回毎回怒られるのは精神的にも堪えるものがあるので、頑張つて仕事を探しているようなのだが、その努力が実るような結果はまだ出ていない。

「だつたら、諦めて農家を継ぐしかないわね」

「嫌だ。まだ一八なのに、人生をそんなことで無駄にしたくないね」

「もう一八でしうが。いつまでも親に甘えて生活出来る年ではないのよ？ それをわかつているの？」

静かながらも妙に迫力のある母の言葉に、実は下唇を噛んで悔しそうに睨み顔を向ける。そして彼は何も言わぬまま、家を飛び出し何処かへ行ってしまった。母は軽く溜息を吐きながら、自分の息子の将来に不安を覚えるだけだった。

実は遊具が滑り台一つだけという寂しげな公園にあるベンチの上で横たわっていた。その表情からはまだ親に対する憤慨が抜けきっていない様子で、左足は貧乏揺すりをしていた。

「何で俺、こんな駄目人間になつちましたんだらつ……」

無意識なのか、実の口から零れるように言葉が出てきた。

確かに彼は誰もが羨む学校を出ている。また彼自身も自らの持つトレーナーとしての資質に自負心を持っていた。しかし、彼を待つていた現実は仕事すら見つからない一ノート生活。嘆きの言葉一つ、出ない筈もない。

「おい」

「つおー？」

突然、実の顔に何か硬い物体がぶつかった。驚きのあまり、彼はベンチから転げ落ちそうになってしまったが、そこは何か堪えきつたようだ。それよりも、彼はいきなり何かをぶつけてきた犯人に警戒と怒りの目を向けた。

しかし、その目つきも相手の顔を捉えると直後に、次第に緩まつていった。

「ミツル？ お前、何でここにいるんだ？」

「久しぶりだな、実。お前にこそ、こんな蜘蛛公園で何寝てんだよ。奴らの糸に捲かれるぞ」

実が目の前にいる男の名前を知っているだけあり、二人は知り合いだと見受けられる。彼からミツルと呼ばれたその青年は、紫色の髪の毛に細い目という不気味な風貌をしている。そのミツルは実に投げつけたと思われる物体を、軽くしゃがんでベンチの下から拾つた。

「お前、モンスター・ボールを俺の顔面に投げやがったのか。それに、蜘蛛公園つて……無駄に懐かしい呼び名だな、それ」

「まあな。でも、そこら見回してもイトマルの姿が見つかりやしない。」こも変わったもんだ

「」こも一応、村の中だからな。野生のポケモンの巣を作らせるのは危ないって、一年前くらいに村の自治が駆除を行つちました

実が平坦_{トク}そうな顔で話をするが、ミツルが悲しげな表情を浮かべた。恐らく、彼にとってこの公園はそれなりに愛着のある場所だつた。

たのだね。」

「前の村長はポケモンとの共存を願う人だったが、別の奴に替わってからはここもすっかりと変わっちゃった」

「そりゃあ残念な話だ。俺が村を出ている間にそんなことがあったとはな」

「それにしてもお前、中卒で仕事が見つかってそのまま村出てったけどさ、何の仕事に就いてるんだ？　お前、最後まで教えてくれなかつたよな」

「今日はそのことで話に来たんだ」

ミツルは今までのノスタルジアに駆られていた表情から一変して、無表情ともとれそうな平坦な顔で話を始めた。

「お前が数ヶ月で旅人をやめたって、知り合いから連絡を貰つたらな。お前には色々と恩があるし、俺の所でお前を雇つてやろうかなと思つたんだ。もし、まだ仕事が見つかってないなら、考えてくれないか？　結果を出せば給料はそれなりに出るし、少し覚悟を決めれば楽しい毎日を過ごせるぞ」

「……ま、マジか！？」

実は願つてもいいない就職話に、勢いよく上体を起こした。その日からはさつきまでの怒りに濁つたものとは打つて変わって、輝きすら発されている。

「ああ。俺もその仕事じゃあかなり上の位置にいるから、お前一人を入れる「ネぐらい何とかなる」

ミツルはその陰鬱そうな見た目とは裏腹に、白い歯を剥き出してサムズアップを見せた。

「まじで助かるぜ！　で、その仕事は何なんだ？」

「ある組織なんだけどな。ポケモンを捕まえたり、トレーナーとバトルしたりする仕事だ」

そこまで話すと、実の表情から歓喜の気持ちが少しずつ抜けていった。理由は恐らく、彼が抱えているコンプレックスによるものだろう。

「その仕事、大丈夫なのか？　俺、トレーナーで結果を出せなかつたから、いつもして二一トアツやつてんだぜ」

「大丈夫だ。うちの組織じゃトレーナーとしての力が弱くても、他の雑用や適当な仕事をやってくれれば役には立つぞ。それに、お前は小さい頃から村じや佐野に並ぶ実力の持ち主だった筈だ。一度、挫折したとしても、そこから立ち上がっていけばきっと良い事があるだろ？」

ミツルはまるで自分の言つことに偽りは無いことでも示すかのように、真っ直ぐと実の目を見つめた。

「なら、お前の好意に甘えさせてもらつとするかな」

「お前……なんだその偉そうな口調は……」

ミツルは思わず苦笑いを浮かべてしまつたものの、パンと手を叩くと実際にベンチから立ち上がるよう促した。

「まあ、これで決まりだな。お前はまず、親にこのことを報告してこい。恐らく、当分は会えなくなるだろうから、別れの時間くらい必要だろ？」

「おお、サンキュー」

「俺はここで待つけど、まあゆっくりしてこよ」

今度はミツルがベンチに座って、実に向かって早く行けと右手をヒラヒラと動かした。それに促されて実は自分の家へと向かって歩き出した。

だが、公園の入り口まで来たところで、実は急に振り返ってミツルに言った。

「お前、こんな所じや寒いんじやないか？ ウツギの所で待つてたらどうだ、あいつも喜ぶぜ」

「ウツギつけ、か……。でも、俺は遠慮するよ」

「そうか」

「こりんなしかミツルの表情が歪んだように見えたが、実はそれから特に何も言つ」となく再び歩き始めた。

「今の俺に会つて……一体誰が喜ぶのだろうか。そして、『ごめんな実。今の俺にはどうやらお前の助けがいるようだ』

ミツルは家へ向かう実の後ろ姿を見送ると、そのまま彼のようこの体を横にして眠り始めたのだった。

第一話 part2

「ミツル、いつまで寝てるんだ？」

「……!? 何だ！」

実がモンスター・ボールをミツルの顔めがけて投げると、それは上手く彼の顔に当たった。ミツルは突然のことに戸惑って荒らげ、しかもその勢いでベンチから転げ落ちてしまった。それを見て実は意地の悪い笑い声を上げる。

ミツルは服の土が付いてしまった部分を払いながら立ち上がり、ただでさえ細い目を更に細くさせて実のことを睨んだ。

「お前……やられたことは絶対にやり返す性格は変わっていないな」「やられっぱなしだとムカつくからな」

「それじゃあ、何で旅人を辞めたんだよ。その時はやられててもやり返そうって気持ちが起きなかつたのか？」

ミツルの急な問いかけに実は一瞬だけ言葉を詰まらせたが、違うと一言否定をした。そして、軽く俯きながら悔しそうに続ける。

「何度も何度も負けた相手に対しても再戦を申し込んだが、結局俺が勝つことなんて全く無かった。だから、もう諦めたんだよ。俺にはトレーナーとしての才能が無いって」

「そりゃ。でも、この仕事はそんな甘つけよいことを言ひ余裕すら無くなるかもしれないぞ。それでも、本当にやりたいと思つのか？」

「ああ、親父の農家を継ぐよつはまだマシだ。どんな仕事でもやってやるぜ」

実は悔しげだった表情を消し去つて、白い歯を剥き出しにしながら意思を表示した。そんな彼の覚悟に、ミツルも何かの決心をついたと同時に少しだけ申し訳なさそうな表情を浮かべた。しかし、実はそんなミツルの変化に気付くことはなかつた。

「それじゃ、帰つて來たということは親に別れを告げたようだし、そこにあるケースを見る限り荷物も整理したようだな。それじゃ行くか」

「そうだな。金は親から結構貰つたから、交通費に困ることもないだろうしな」

「当たり前だ。俺は金なんか貸さないぞ」

ミツルは微笑しながら、再び戻つてくるかも分からぬ故郷の景色を目に焼き付けると、まずは駅に向かつて蜘蛛公園を後についた。実もそんなミツルの後ろについていった。

一人が向かつたのはコガネタウンというジョウウト地方でも有数の大都市だった。実自身、この街に来るのは初めてだったようで、立ち並ぶ高層ビル群に目をキラキラと輝かせていた。

確かに、田舎から來た人間にとつてこの街は憧れそのものだろう。カントー地方に直通するリニアモーター。全国でもトップレベルの品揃えを誇るコガネデパート。ジョウウト中に電波を発信するラジオ塔。どれもこれも、ワカバタウンでは見ることの出来ない建物や施設ばかりだ。

「すげえな、コガネシティって……デカイ建物ばかりじゃん」

「そりゃ、そうだ。どの地方にもド田舎と大都会は一つずつくらいあるだろ」

「そのド田舎はワカバタウンのことか……」

「ん、まあそうなるな」

二人は街の大通りを歩きながら、これから実が生活する寮へと向かう。しかし、まだ寮までは距離があるらしく、実は首が痛くなる程の高さのビルをあちらこちら見回していた。

それから十分くらい歩くと、一人はとうとう寮に辿り着いた。その外観は立派とは言えたものではないが、社員寮としてはまあまあ丈夫そうで雇つてもらつ身としては十分過ぎる建物だつた。

「今日からお前にはここで暮らしてもらつぞ」

「分かった。すぐに荷物を置かせてもらつな。部屋とかは誰に聞けばいいんだ？」

「中に管理人がいるから、その人に聞け。話はもう済ませてあるから」

実はサンキューと言つて、ケースを引つ張りながら寮の中へと入つていった。

寮の中は普通の団地住宅みたいなもので、一階には管理人さんがいたので、実はその人から部屋の場所と鍵を譲り受けた。そして二階の一番階段に近い部屋の扉を開けると、中に入つて重たい荷物を部屋の隅に置いた。

ミツルはそんな部屋に着いて伸び伸びとしている実の姿を見て、ますます申し訳なさそうな表情を浮かべた。それはまるで、何か重大なことを実に隠しているようだつた。

第一話 part 3

一人はいつまでも部屋にいるわけにはいかないので、寮を後にすることにした。

「これからチョウジタウンに向かうけど、行ったことはある?」「チョウジは一度だけあるな。場所は覚えてるから、飛行ポケモン使つていいくよ」

「それなら交通費も浮くな、ありがたい」

ミツルがそう言つと、彼はベルトに付いていたモンスター・ボールを一つ手に取る。そして、それを思い切り上に投げた。ポンッと酒瓶からコルクを抜いた時のような音と共に、中からピジョットという鳥型のポケモンが現れた。

実も同じように、モンスター・ボールからポケモンを出す。種族はリザードンと呼ばれる火を操るポケモンだ。

二人はそれぞれのポケモンの上に跨るように乗る。そして、ミツルの行くぞ、という言葉を合図に一匹のポケモンが「ガネの土地から飛び立つた。

「ポケモンを使うなんて久しぶりだ」

実は少しずつ小さくなつていい「ガネの街を見下ろしながら、ぼそりと呟く。彼は旅人を辞めてからは、一度もポケモンに触れていなかつたようで、その管理もポケモンセンターや預かりシステムに任せていたらしい。その為、街を見下ろすという感覚とリザードンの少し暖かい背中が懐かしく思えるようだ。

ポケモンに乗っている間は、舌を噛む可能性があり、なるべく喋らないようにしているので、静かにしている人間が多い。一人も一

緒だ。会話を交わすことはせず、それぞれ辺りの景色を楽しんでいる。

地方という単位はそこまで大きいものはないので、チヨウジタウンには意外とすぐ着いた。一人はそれぞれのポケモンをそれぞれのモンスターボールに戻す。

「しかし、こんな町の何処に行くんだ？」

「実は、俺たちの組織は地下に拠点を置いていてね。まあ、ここは数ある支部の一つなんだけど」

そういうつてミツルはとある一軒の建物の中に入った。実もその後ろについて、その建物の中に入った。

中は至って普通の家だった。家具が結構多めに配置されているところには不自然な点も感じるが、それ以外は本当に何の変哲も無い人の住居だった。

「こここの何処かに入り口があるのか？」

「そうだ。俺が開くから少しジッとしててくれ」

「……なんか秘密組織みたいだな」

ここで初めて実が違和感のようなものを覚えた。急に身体が悪寒のようなものでぶるつと震えたからだろう。

しかし、ミツルは決して待ってくれるようなことはせず、数ある家具のうちの一つを横にずらした。すると、そこから地下へと繋がる階段のようなものが現れた。

「俺は今から色々と書類とか取り出すから、お前はこいつら邊で窓いでてくれ」

「分かった」

ミツルは実の了解の言葉を聞くなり、その先が真っ暗でよく見えない階段をゆっくりと下つていった。

「おやかとは思うが……ミツル……」

少しずつ見えなくなつていいくミツルの後姿眺めながら、実の不安は少しずつ高まつていくのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4559y/>

裏世界の住人

2011年11月17日21時04分発行